

第

49代「姫路お城の女王」
として昨年5月から1

年間、学校教育学部4年の満田芽生さんは他の2人と共に、生まれ育った地元の見光親善大使を務めた。近所の人に勧められ、「姫路に恩返しをしたい」と応募。2度の選考を経て、40人の中から選ばれた。

ふるさとへの思いが芽生えたのは高校時代。オーストラリアへの留学当初、何を話そうかと会話に困っていた時に、ホストファミリーや同級生と打ち解けるきっかけをつくってくれたのが姫路城だった。「お堀の中に学校があったので姫路城はとも身近な存在でしたが、まさか海外の人たちが知っているとは思わなくて。会話が弾み、偉大さを再認識しました」。以降も外の世界に触れるにつれ、地元への愛着は増していったという。

お城の女王に内定してからの3カ月間は、市内各地の施設で説明を受けたり、マナーやアシスタント業務を学んだりと研修漬けの日々を送った。5月の姫路お城まつりで正式にお披露目されると、活動は本格化。北海道から九州まで各地を回り、自治体やマスコミ各社への表敬訪

問、イベント会場でのパンフレット配布やステージの上からのPR、観光業者への売り込みなど、活動の場は多岐にわたった。

「学業との両立に苦労しましたが、普段は会えないような人たちとたくさん出会い、お話を聞けたことは本当にいい経験になりました」と笑顔で振り返る。任期を全うした今、数学世界の面白さを教えてくれた高校時代の恩師のような教員になるという夢にぶれはないが、目指す教員像はより明確になったと話す。

「地域のイベント一つ一つに多くの人々が尽力されていることを知りましたし、皆さんの温かさに触れることができました。こうした経験を生徒たちに伝え、支えてくれる人への感謝を忘れずふるさとを愛するような人に育てたいです」

言語系コースで英語を専門に学びながら数学の講義も並行して受講し、教員免許はどちらの教科でも取得できるよう努力してきた満田さんは、来春から大学院の理数系教育コースに進学する予定。「より専門的に学びを深められるのが楽しみ」と心待ちにしている。

観光親善大使の活動を通し
目指す教員像が
明確になりました



キラリな人

みつだめい 満田芽生さん

学校教育学部
言語系コース(英語)4年

平成8(1996)年、姫路市生まれ。賢明女子学院高校在学中の23年12月から1年間、オーストラリア・ブリスベンにある高校に留学し語学力を磨いた。大学ではオーケストラ部と国際交流サークル「HIC」に所属。28年5月、第49代「姫路お城の女王」に就任。今年5月まで、姫路市の観光親善大使としてふるさとの魅力を発信し、観光振興に尽力した。



「お城の女王」として姫路市の観光ブースでPR